大分市歴史資料館ニュース

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

vol. 85
2008. 12.6

木臼発見時の様子（大道遺跡群：大分駅南側）

大分市歴史資料館　テーマ展示Ⅲ

この遺跡、この一品

平成20年12月6日(土)～平成21年2月1日(日)

トピックス　馬をめぐる座談会

平成20年度特別展「馬とのつきあい－おおいた馬物語」の記念行事として、11月9日（日）「馬をめぐる座談会」を開催しました。

まず、特別展を企画した大分市美術館の長田弘通氏より、日本人の馬との関わりを古墳時代から現在まで紹介した基調報告が行われました。次に、パネラーの大分県教育庁文化課の田中裕介氏、別府市立別府商業高等学校の三重野誠氏、大分大学教育福祉科学部の豊田寛三氏の三人の先生からそれぞれ、専門の古墳時代、戦国時代、江戸時代の馬利用について補足説明を行っていただきました。田中氏は、鐙（あぶみ）は4世紀に馬に乗ることが苦手な中国の漢民族によって発明され、5世紀に当初の片鐙から両鐙となり、古墳時代にはこの両鐙をはじめとする最新の馬具が馬と共に日本に伝えられたと説明。三重野氏は、室町時代の勘合貿易の輸出品に硫黄・太刀・扇・屏風などと共にそのトップに馬があり、重要な献上品として馬が位置付けられていたこと。また、大友氏では八朔（はっさく）の行事に主従間の贈答品として多くの馬が進上、または下賜（かし）されていたことを説明。そして豊田氏は、戦がなくなり、武士が城下町に集住し、草場や山が開墾されていった江戸時代では、環境的・経済的にも馬を飼うことが武士たちにとって非常に難しくなったこと。そのため藩や家臣が所有する馬の数は次第に減少し、乗馬は武士の武芸として位置付けられていったと説明されました。

座談会では、主に日本における荷馬車の利用について、その発生などをめぐりパネラーの各先生の談話を中心に意見交換が行われました。

座談会の様子

インフォメーション　Information

ふれあい歴史体験講座

実施日と内容　12月20日（土）　和凧作り（午前のみ）
1月31日（土）　勾玉作り

時　間　9時30分～／14時～（各回約2時間）

材料費　和凧作り　1枚　300円
勾　玉　　1個　200円

定　員　和凧作り　50名
勾　玉　　70名（ともに先着順）

応　募　電話でお申し込みください。
受付開始日は市報などでお知らせします。

テーマ展解説講座

内　容　講座室でテーマ展「この遺跡、この一品」についてスライドなどで解説したのち、展示室をご案内します。

日　時　12月21日（日）　14時～15時30分

講　師　大分市文化財課職員

参加費　講座は無料ですが、展示をご覧になる場合は観覧料が必要です。

ミュージアム・シアター

実施日　12月21日（日）
◎弥生の風　安国寺遺跡
◎まんが日本昔ばなし
「おいてけ堀」
「河童（かっぱ）のくれた妙薬（みょうやく）」

1月25日（日）
◎縄文人の足跡　大野川流域
◎まんが日本昔ばなし
「うばすて山（やま）」
「芋（いも）ほり長者（ちょうじゃ）」

時　間　13時～14時

料　金　無料　※事前の予約は必要ありません。

休館日のお知らせ

歴史資料館は、年末年始の12月28日（日）から翌21年1月4日（日）まで休館いたします。

利用案内

■開館時間　9時から17時(入館は16時30分まで)

■休 館 日　第1月曜日の翌火曜日と第2～5月曜日(祝日の場合は開館)
祝日の翌日(土・日曜の場合は開館)
年末年始(12月28日～1月4日)

■観 覧 料　大人200円(団体150円)　高校生100円(50円)
※団体は20名以上、小中学生は無料
※特別展開催中は別料金となる場合があります。
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳の交付を受けている方とその介護者は無料。受付で手帳をご提示してください。

■住　　所　〒870-0864 大分市大字国分960-1　TEL 097-549-0880

■交通機関　JR久大本線　豊後国分駅下車
大分バス　国分新町ゆき　歴史資料館入口下車
大分自動車道　大分I.C、光吉I.Cともに約15分

発行日：平成20年12月6日
発　行：大分市歴史資料館　〒870-0864　大分市大字国分960-1　TEL097-549-0880
※ホームページ　http://www.city.oita.oita.jp/(大分市ホームページ)の「施設ガイド」も併せてご覧下さい。

大分市歴史資料館　テーマ展示Ⅲ

この遺跡、この一品

会期：平成20年12月6日(土)
～平成21年2月1日(日)

大分市域は、古代に豊後国府をはじめ大分・海部(あまべ)2郡の郡衙(ぐんが)（役所）もおかれるなど、古くから豊後の中心地として発展してきました。このため、多くの遺跡が発見されており、平成20年現在、その数は417箇所にものぼっています。

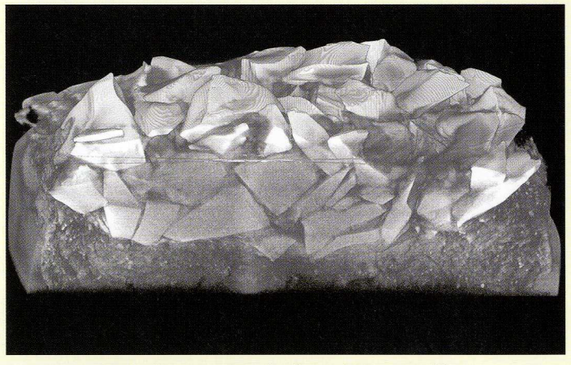
こうした遺跡の発掘調査では多くの貴重な遺物が発見されています。今回はこれらのうちで、歴史の証として特筆すべき一品を選んで展示します。

世界で唯一「カゴ入り黒曜石」

横尾遺跡は、縄文時代の貝塚で有名ですが、その貝塚近くの地表下約2mの地点で、編みカゴに入れられた状態の黒曜石が出土しました。容器に収められた石器が「容器ごと」出土した例は国内には無く、世界でもわずかで、「カゴ入り」となると世界に例がないものです。入っている黒曜石は全て姫島産と考えられ、約7300年前の火山の噴火で積もったアカホヤ火山灰直下で発見されました。当時のこの地点は入り江にほど近い低湿地で、船着場だった可能性がある場所でした。噴火に伴う地震や津波、降灰におどろいた縄文人が捨てていったものなのかもしれません。

カゴ入り黒曜石

カゴ入り黒曜石が発見された発掘調査の様子


CTスキャンによるカゴ入り黒曜石の断面

井戸から出た木臼　～大道遺跡群

大分駅の南側には、大道遺跡群という約1700年前の古墳時代初めごろの遺跡が広がっており、環濠(かんごう)集落が営まれていました。今年2月末に、この遺跡の井戸跡からクスノキを加工して作られた木臼(きうす)が発見されました。同じ時期のもので、このように完全な形を保って出土した例は全国的に珍しいものです。また、クスノキで作られた蓋(ふた)と思われる半月型の板もそばから出土しています。臼をよくみると、デザイン性が感じられるほどヤリガンナで丁寧に加工されており、古墳時代の人々の技術と感性におどろかされます。

井戸から発見された木臼と蓋

東海地方からきた壺

下郡(しもごおり)小学校の発掘調査で出土した須恵器(すえき)の壺で、奈良時代の終わり頃に駿河(するが)・伊豆(いず)で作られたものです。この種の壺については「鰹(かつお)の煮汁」を都まで運搬するために使われたとする説がありますが、西日本での出土例は少なく、九州では唯一の例です。

この壺は多くの食器や調理用具とともに出土しました。どのような経緯で1000kmも離れた大分の地にもたらされたのか興味深いところです。

下郡遺跡群で出土した、東海地方でつくられた壺

下郡遺跡群で発見された古代の建物跡の柱穴

東海地方産の壺が出土した古代のゴミ穴

修理された御用品　～府内城城下町跡（旧米屋町）

江戸時代には京都の天皇家に納めるため、肥前有田で特別につくられていた染付(そめつけ)の碗や皿があり、「禁裏御用品(きんりごようひん)」と呼ばれました。府内城下町の米屋町（現在の大手町1丁目）で出土した染付皿は、京都以外では出土例のない禁裏御用品で、割れて焼継(やきつ)ぎされ、裏に「光さ□寺」と記されていました。このことから、これは府内城下町西南端にあった光西寺が、おそらく京都の公家を通じて入手し、その後不幸にして割れたため、焼継ぎ修理に出したものの、そこで火災など何らかの事故にあってしまい、そのまま捨てられて持ち主の光西寺には戻らなかったものと考えられます。

裏に「光さ□寺」と書かれた染付皿

米屋町（大手町1丁目）の発掘調査風景

「光さ□寺」銘の皿が出土した、陶磁器が多量に捨てられた土坑